昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十八年三月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第一六七号）

慈光

第十五巻　第二・三号

目次

争闘と解脱……近角常観……(1)
近角先生の想い出……松村肅……(7)
仏典と私との親しみ……福島政雄……(10)
堂の鈴（十）……佐藤強三郎……(19)
一道会の記……榊原徳草……(25)
ここに来るまで……池山寿夫……(30)
「四聖諦」に聞く……花田正夫……(35)

争闘と解脱

近角常観

一人生の争闘

争闘とは私共人生における相対争闘であり、解脱とはその争闘苦悩の人間が、三塗勤苦のところにいて仏の光明を聞き、皆休息を得て、また苦悩なけんの味いである。

一言にいえば今日の社会問題、思想問題は、畢竟ずるに人生の争闘たるを出ぬ、言い換えれば五分五分たるを出られていぬと思うことである。最もこれらの問題に限らず総ての問題が、人生は五分々々の争いたるを出ぬのであるけれども、最近は各種の問題が起りて、更にそれがいよ〳〵甚しく、殆んど底止するを知らぬという状勢になつて来た。

そこで初はかく争うことを以て得意とし、勝つた積りで精力を奮つていた人もあろうが、かく底止する処を知らぬとなれば、次第にその争いのために苦しみ、争い無き平和に到りたいとの希望もあろうと思うのである。けれども根が五分五分で出来ている人生故、それに到り得ない苦しんでいる人もすくなくなかろうと思うのである。こういうことはそういう社会、思想の問題よりも、更に剴切に言えば直接友人人間の問題、同僚間の関係において、こういう悩みにおちいつて居られる人がすくなくなかろうと思うのである。即ち如何にすればそういう争いの悩みより救われるかの問題なのである。

しかるに人生は五分々々であつて、何程その争いの思いをやめようと思うてもやめられず、転々して限りがない。仏教に於いて流転輪廻ということを言うは、輪廻転生の意味にすれば深いこともあるも、分りよく云えば、即ちこの転々限りのないことである。こは争いの心ばかりに限らず親が子を、子が親を相愛する恩愛の問題にしても、そのために互に苦がやまぬ。故に仏教においてその恩愛をすてて解脱するの語があるは、冷いようであるけれども、この苦悩より脱れ出ることを言うたのである。かくそれからそれへと苦しんで行く人生に。——

しからば如何にすればその苦より離れ、五分々々より脱却することを得るか。私の経験を本として言えば、自分の

方から争いをやめ、隔てを離れ、何処までも無我にして向つて行くことが出来れば、それは離れられるに決つている。

故に何人もここで人を悪しく思わず、如何なる場合にも不足に思わぬようの修養を試みる。けれどもそれが何程つとめても〳〵煩悩は尽きず、不足、隔ての思いはやまぬとなつて、修養の結果は明かになつて来る。すると自分はそういう争い深い、我慢深い、執着強い、そういう恐ろしいのが自分の本性であつたことが明かにあらわれてくる。我々罪悪の凡夫であるということも、一寸思い難いかなれども、かく何程争い、隔てなきようにと試みても、努めれ努めるだけいよ〳〵不足の心が著しくなつて、いよ〳〵罪悪の自分であつたことと悲しくなつて来るというわけである。そこでそういう自分といよ〳〵なりはてるが。——

その自分がどう安心されるかというに、常に言う如く、このたびにここで正反対に、そういう隔て、我慢で向つて行く処の自分に、先方よりは何処までも我慢を離れ、五分五分を離れて、——ここは此方は五分五分でやればやる程、相手も五分五分が強くなつ来るわけである。五分々々性の奴には、此方が何処までも五分五分を離れて向つてやらねばならぬと、それを自分でやりたかつたも、経に一分一厘も出来得ないで終つたところの、その争い心の私に、そのやまぬのを見たからと、飽くまでも争わざる無我をもつて向うて下さるとなると、ここでこの私がどうなるかという問題なのである。更に適切にいえば、こちらは争い心が本性の奴ゆえ、その本性を発揮して何処までも争うてゆく。そうすればする程その性分を哀れみて益々無抵抗にされたとなれば、如何な隔て、争い深き我々も、その無我の人の前には、感ぜずには居られぬでないかということなのである。即ち人生に果してかくの如きの絶対の情けを持つて、そういう争い心の私に向つてくるる真実のありやなしやによつて、問題は決定するわけである。そうしてそういう私に、飽くまで身を捨てた態度で争わず、その争い心の根を断つまで、広大の真実でその者を見てやらねばの慈悲であらわれて下された大悲の人で、即ち聖人の言わるる無量寿、無量光のめぐみで、即ちそれが阿弥陀如来である。それが聖人の言わるる五劫思惟の本願、兆戴永劫の真実と、こういうことになるのである。五劫思惟、兆戴永劫など聞くと、何やら我々の実際生活と離れた教理の筋道でも聞くようの感があるも、五劫永劫はこの隔てる私に何処までも隔てず向つて下さるれたお真実が、この五劫永劫となるわけであるのである。

二解脱の信味

すこし専門にわたるようであるけれども、一寸ここで一

言するが、全体他力の教の源は支那で善導大師の称えられた処と言つてよい。それが日本に来て法然上人の上に現われたというわけである。その善導大師の書かれた至心の解釈など文句通りに読むと、

『如来がすでに我々のため永劫の真実を以つて向つて下された仏なれば、我々も亦仏の如く至心の真実を以つてせねば』

と、書いてあるのかと思う程まで読める。又我々としてのややともするとそう考えるのであるけれども、それで行けば必ず行き詰るばかし。何故となれば、真実にせんとすればする程、自分の真実にされぬを発見するばかし故。

ここは人間同士の間でも、先方が真実なきに対し、こちらが最後まで真実でやり通せるかというに、否。私など自分が献身的にやれていると自分で思うていたまでにやり抜いて、それでも人が認めてくれぬとなつたら、人のすることが真実でないことが思えてならぬようになつたのであつた。するとそれ程人を悪しく思わぬよう、不足に思わぬよう思うていて、さてかく人に不足が出て来るというはおかしい。これは今まで身を捨てて真実にしていると思うていたのが本当にして居たのでなく、人に認められたいため、人に褒めて貰いたいためしていた真実に過ぎなかつたからと、ここで今まで人に善くしていると思うて進んで居つた残らずが、真実のものでなかつたことに気がつき出したわけであつた。

故に自分が真実にしていると考える間は、誰もがここの処に気がつかぬ。故に今日喧しい社会闘争の問題にしても、あれが皆自分の方が善いと考えるから、あの通りみなやつて居られるのである。自分の主張が正しい、真実と、それで何処までも争つて行くさきは、彼のアメリカのウイルソンと同じである。けれどもそういうように自分が飽くまで真実に出来ていると思うて居つたのが、本当の真実でなかつた。第一我こそ真実々々と言うて居つたのが恐ろしき不実であつたと、ここになるともう仏の如く真実にして行く、その道では行き難くなる。故に聖人は善導大師の文をすつかり読みかえてしまつておいでになるのである。

すると私共、自分が真実に出来るという道はなく、しからばそのされぬを哀んで下さる仏の真実とはどうかというに、かくこちらが真実にされぬを見て、それではいかぬと斥けられるならば五分々々である。我々が何程しようと思うても出来ぬを哀れと了解したというお慈悲なれば、我々が益々我慢がやまず、真実にされねばされぬ程、その者にいよ〳〵我慢を離れ、真実を以つて向つて下さる処の真実である。そこは聖人の『信巻』には

『一切の群生海、無始よりこのかた、乃至今日今時に至

るまで、穢悪悪染して清浄の心なく、虚仮諂偽にして真実の心なし。

是をもつて如来、一切苦悩の群生海を悲愍して、不可思議兆戦永劫に於て菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修、一念刹那も清浄ならざることなく、真心ならざることなし。』

一念一刹那の間も我々の不実を斥けず、不実のこちらに何処までも真実をもつて向つて下さる。その真実の塊りが如来故、如何な真実ならぬ我々も、そのお見捨なき真実のためにはこちらの不実が敗けて……茲が大切である。我々にはかく真実が無いが、真実が無いじまいだとは言わぬ。我々の炭はどの部分として不実ならぬはなき黒暗々たる炭であつても、その炭を捨てぬ真実の火が一度にその炭に燃えつけば、その真実の火は一度に炭の中心まで徹底して如何に不実の炭も終に火にされてしまうが、御真実の火の味いであると申すのである。

こういうことを言いたくなるのも、今日の青年、又は思想家が、この御真実の火にこちらが救われるのだということを考えて居ぬ。何か自分で骨折り発見でもして行かねばならぬことのように思うている。この点においては真宗の教が行き渡つて居るというのも言葉の上だけのことで、実生活の上の力としては充分でない。お助けとは極楽に往くくらいのことに思うて、この世にある限り悪いままである杯と、殆んど今日は一般が炭が火にされることは考えて居ない。御真実はかく私の不実を救おうとのお慈悲の火でまします処が有難いのである。即ち解脱とはこの御真実の火に遇い、如何な私の不実もこの御真実には恐れ入り、終に真実に同化させられた処の味いである。それはその真実のためには、如何な不実もそうさせられてしまうのである。するとこの争いの人生に於いて、こちらより争いがやめられるでなけれども、争う者に争わず向つて下さるこの御まことのためには、初めてこの人生に於いて善し悪し離れた立場を与えられ、それでやらせて貰うことが出来る。それはむしろその御真実のお力の自然の顕現として、そうさせられるということを申すのである。これで一応申そうと思うたことは申してしまつたわけである。

三　人格の改変

そこで一つ私の方より問題をこしらえていうならば、こういう方が最も多かろうと思うのである。

『そういう争わざる態度で向われる恵みと聞けば如何にも有難く、その恵みの仏には頭がさがるけれども、相変らず五分々々で来る人間には、矢張りもと通りでやる外に仕方が無いではないか』

と、これがよく受ける処の質問である。無理もないこと

と思うのである。

併しこれでは『争わぬ者には争わぬも、争う者には争う』ということになつて、まだ我々の五分々々性を救われたということにはならぬ。救い、解脱ということは、その如き『こう来る人にはこう行くも、ああ来る者にはああ行く』という如きことでなくて、一度この恵みに遇うたため、根本的に我々こちらの人格が一変させられてしまい、性質が改変させられてしまう、ということなのである。

ここは解りよく譬を以て言えば、ここに甲乙二人の者ありて、『争うのはよくない、止めたら』と申し出たとしよう。第三者の優しい仲裁には甲も乙も『有難う御座います』と頭下げるも、御互同士は矢張り争うているのなら、これで本当に頭が下つたと言えるかどうか。

『優しく来る人には優しく向うも争う者には争うて行く』、『仏の恵みには頭下げるも、人間同士は争つて居る』のなら、仏の恵みで解脱されたにはならぬでないかと申すのである。故にこの時、若しやこの仲裁に出た人が厳しく出て『全体止めよというのにいつまでも争つているお前が悪い』と言われると、今度は必ず『何処が悪い』とその人にも刃向つて行くにきまつているのである。

即ちかく、優しく言わるれば優しく行き、悪いと言われれば何処が悪いとなる、これが我々の争いの性分だと申すのである。そこでその刃向つて出たのに喧嘩を始められるのなら恵みでなけれども、

『イヤこの仲に飛び込んだ上は、もとより喜ばれよう筈は無い。如何に悪しく思うとも、それをこちらは一点悪しくは思わぬ。併しその争いの性分でお前の苦しんで居るのが気の毒故、それを救おうと思うたこちらの誠意だけは受けてくれ』

と、争うこちらに悪しく思わず、遺る瀬なく向わるる真実のためには、終に恐れ入りましたと、この時にはその人だけにでない。ここの『恐れ入りました』は、この恵みのためにこちらの性分の一変させられ、同化させられてしまつた言葉なのである。その時には一方の相手が喧嘩やろうとしようが『措いてくれ、もう懲り〳〵した』と、争い心の根を断たれてしまつたのが、仏の恵みに救われたとなるのである。

なお一つ言えば、ここに雪降り風吹き、四方八方人生のつめたさに閉ざされて悩む時、（聖人が日野左エ門の門前で遇われた如く）あの雪が〳〵と思うと同じに、誰れ悪し、彼れ悪しと苦しむが人情である。ところがそれはその如き冷い人生に居るの故、それ寒いは無理ないと、その寒いを哀れみ、寒いを何処までも温めようのお慈悲の火に遇えば、如何に氷雪はあろうが、自分はその温かさであたたかに居れるでないかと申すのである。温かにさえ居れば、如何な風雪に外界は囲れていようが、誰れ悪し彼れ悪しの問題は自から消失するでないかと申すのである。

これは聖人のことを連想する故――聖人は左衛門の門前でその風雪の間に一点不足なく喜ばれたは、聖人が忍耐して、若しくは聖人の御心持ちが美わしくあられたからと取つたら、聖人の値打ちはない。聖人のは、その助からぬ、寒い心中を哀れみ、お見捨てなきお慈悲と共に一夜を明かせて貰われたからである。

マア今日のすべての問題――社会問題、思想問題にしても、すべてがこの温まりようがない処から起つて居るかく如何にしても温まりようなき御同ようが、その冷きを哀れみお見捨てなき御真実の温さ一つで、その冷きより解脱させて貰う。これが争いより、苦悩より、境遇より解脱させて貰うところの味いである。すると如何に寒さがあろうが、その寒い限りどれだけでも温めようの慈悲であるから、如何に寒かろうが、風吹かば吹け、雪降らば降れ、如何にも寒くも寒くはないと、むしろここまで言い切つて置いた方が誤りがない。勿論それ頂いたからとて、あと絶対に寒くはないのだとは言わぬが、如何に寒さが来ようが、その寒い限りどれだけでも見て行こうとあれば

『よろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよ〳〵往生は一定とおもいたまうべきなり』

『歎異鈔』の九章はここをお書きになつたものである。

大正十年二月号求道所載。

惡罵の驅走

年少のバラモンが或日仏陀の所に来て悪口しました。

仏「お前はお祭などで親戚や知人を招くことがあるか」

バ「そういうこともあります」

仏「その時、御馳走を出しても客人が食べねばどうか」

バ「御馳走はそのままのこります」

仏「お前は今色々な悪口雑言をしたが、自分はそれを食べない。皆のこすからお前がうけよ」

と、少年バラモンは

バ「いや受けなくても、これはあなたに贈つたのだから、あなたに属する」

仏「もし罵りに罵りを報い、怒りに怒りを報い、打てば即ち打ち、闘えば即ち闘うのを、やりとりしたと言う。罵辱呵責すとも怒らず、闘わず、報いることなければ、与えたとは云えない」

とお答えになりました。

近角常観先生の想い出

松村　粛

花田さんからおたよりに、私に「近角先生の想い出を書くように」との御希望です。

私が近角先生に初めてお会いしたのは、明治四十年、私が東京の旧制第一高等学校へ入学した際で、今から五十数年も昔の事です。それ以来、先生が御他界になるまで、特別に親しくしていただきました関係で、先生に関する数々の想い出は限りない次第です。その中から私が興味深かく感じて居る思い出の一つを申述べて折角の花田さんの御厚意に添いたいと存じます。

昭和の初頭頃のことと記憶します。或る秋の日、千葉大学仏教青年会（樹徳会と名づけました）で、近角先生の御講話をお願いするために私が上京して、本郷の求道学舎に先生をお訪ねしました。千葉は東京と汽車で一時間程のところです。その日の午前十時頃、千葉駅で乗車する際、日刊紙（朝日新聞）を求め、車中で読みました。

ところが遇然三面記事に「さすがは仏教界の泰斗」という見出しで、南条文雄博士の写真入りの記事が、目につきました。それは、南条博士の御長男が、その春、東京大学の文学部を卒業せられて目出度く文学士となられました。

ところが不幸にも腸チフスに感染せられて、その秋に亡くなられました。折角目出度最高学府を卒業せられた喜び新たな時に、突然のこの御不幸に、朝日新聞の記者ほ吊問を兼ねて、最愛の御令息を失われた父君、南条博士の感懐をお尋ねしたことです。

新聞記事によれば「さすがほ信仰界の泰斗である。博士の居室に通されたが、いささかも取り乱した様子も見えず明窓浄机の前に端坐せられて、無常観に徹して居られた」というようなものでありました。

私が求道学舎を訪れ、受付へ名刺を渡しますと、早速近角先生御自身、玄関へお出迎えになり、先生の御居間へ御案内を受けました。

その際、先生は私に向かわれ「今朝の新聞で南条博士の記事を読みましたか」とお尋ねになりました。私「ハイ汽車中で読みました」　近角先生「あなたはあの真似ができますか」　私「私はそのような経験がございませんのでわかりませんが、南条博士のような平静な態度は六ケ敷いように思います」　近角先生はここで、はつきりした声で「私にも六ケ敷い」と云われました。私は先生の此のお言葉

に意外な感じがして、聊か驚いた程です。

近角先生は私に対して次のようなお話をせられました

『私（近角先生）は、先年の夏、青森の求道会から招かれたことがある。同地の求道会は篤信の人々が多勢集まつて中々盛んであつた。私の講話は、夕刻七時頃に始まり、二時間程「歎異鈔」の講話を行つた。ところがその講話の途中東京の自宅から電報がとどいたとのことで、世話人から壇上の私に手渡しせられた。電文ほ「文常発熱三十九度、腸チフスの疑いあり。用事済み次第すぐ帰れ」というのでした。私は非常に驚いたのでしたが、何分講話の途中であつたのでそのまま話を続けて所定の講演を終了しました。そこで更めて電文を読み直しました。これは大変である。私は、何とも心配になつて、世話人の人に「今夜青森発上野行の汽車は何時か」と尋ねた「世話人ほ時間表をしらべたが、上野行終列車はすでに発つて居り、今一つ青森発仙台止まりの終列車があるだけとの次第であつた、私はそれでは仙台まで帰りたいと申出た。ところが世話人のいうところでは、翌朝仙台発の最初の汽車は始発が青森駅であつて青森から乗るのも、仙台から乗るのも上野着の時間にかわりがないとのことで、宿も定まつて居ること故、ゆつくり当地でおやすみになり翌朝の一番でお発ちになるほかないとのことであつた。私においてもその意味は明かに了解せられるのであるけれども、どうも気持が落ちつかない。私は世話人に「矢張り今夜仙台まで帰りたい」と申出た。世話人の人々はだいぶ困つた様子に見えたが、とも角も私の云い通りにして、仙台へ長距離電話をかけ、駅前の旅館に部屋をとり、青森発仙台行の終列車に私を見送つて呉れた。（筆者註—当時の青森求道会の方々が此の文をお読みになれば感概深いことと思います）

仙台での旅館ほ何分駅前なので、終夜騒音が耳についてほとんど安眠出来なかつた。その翌日、早暁青森から来た始発に乗つて上野へ向つた。上野駅には自宅から数人の者が出迎えに来ていた。私は出迎えの者の顔を見ると「文常の病気の様子」をたずねた。「坊ちやんは昨夜は熱が高かつたので一同心配しましたが幸に普通の感冒であつたとみえ、今朝ほ下熱して今は全く平熱で元気で遊んで居られます」と。この答えを聞いて私ははじめて安堵したのです』以上が近角先生のお物語りでした。

私の近角先生に対する尊信の程度は、云わば絶対とも云うべき強いものでしたが、その際の私は、少々奇妙に感じて「私なら世話人のいう通りに青森の宿に泊まつたと考えます」と幾分批判気味に申上げたものです。それに対して近角先生ほ、次のように私に訓えられました。

「仏の信仰は決して、医薬の麻酔剤のようなものであつてはならない。むしろ、理智の眼を開いて、人間の情操を明徹ならしむるものである。喜ぶべき事を喜ばず、憂うべきことを悲しむことが出来ないのは、それは一種の迷いである。真に怒るべきことは大いに怒り、真に喜ぶべきことは、天に躍り地に躍りて喜ぶのが自然であろう。仏は転迷開悟の大法を訓えられて居る。信仰の力は決して人間の情操を鈍麻せしむるものではない」

私は到底筆舌に尽し難い深い感激を覚えて千葉へ帰りました。

昭和三十八年二月稿了。

両頭の蛇

昔一匹の蛇がおりました。或日のこと、頭と尾とが互にそのすぐれたことをあらそい合いました。

頭「われに耳ありてよく聞き、眼ありてよく視、口ありてよく食い、行く時ほ常に前に立つ。だからすぐれている。お前にほ出来まいが……」

尾「お前が前に行くことが出来るのは、自分がうしろで助けているからである。そうしなかつたならばお前には何も出来ないのだ」

こう言つて、尾は木に身を巻きつけて離さず、三日もたつた。とうとう飢えて死にそうになつたので、頭は降参して

「お前がすぐれていることがわかつた。寸時放せ」

と。尾が放つと、

「お前すぐれているから自分よりさきに行け」

と。尾はよろこんで進んだが、目のない身とて、程なく火坑に落ちて身をほろぼしました。

（註）悪平等の立場で争い合う者の破滅をいましめられたものである。真の平等ほ、そこに自ずと秩序があるもので、親が子供を平等に愛する故に、女子にほ女子、男子には男子、それ〳〵に相応してそだてられる。真の平等ほ差別に順応し、そのままが真の平等に帰している。

仏典と私との親しみ（三）

福島政雄

菊花栽培の喩

どなたの句でありますか知りませんが

いかばかりお手間かかりし菊の花

という句があります。この句は私に以前から大分深い感じをあたえている句であります。それにつれて私の父のことを想い出します。父は中年以後、菊を育てて居りました。熊本でありますが、熊本の菊というものは御存じでありますか、どうでありますか、今頃花屋さんで見るような菊でなくて、一重咲きのすつきりとした菊であります。それを三列に植えるのでありますが、赤、黄、白と云う順序に植えまして、三列の一番うしろが一番高くなる様に、真中が中位の高さ、前のが一番低く育つ様に肥料を与えますのであります。

一番始めが三月の頃でありましようか、根分をして、今のように育てるのでありますが、なか〳〵むつかしいのであります。それを父は毎年根気よくやつて居りました。ところが私が浅薄なものですから

「こんなに菊を春まだ寒い時から育てて、そして菊の花の咲いてる間は十日かそこらじやありませんか」

と言つたのであります。えらく叱られまして

「そういうことを言うものじやない」

と。あとで考えますと、えらい浅薄なことを言うたものだと思います。つまり父親としては、根分の時から、花の咲くまでの育て方、それが非常な楽しみなのでありまして、成程花の咲くのは十日ばかりか知れませんが、花の咲くばかりが楽しみじやない、ずつと育てて今の様な風に苦心してやつて行く、そこに何とも云えない楽しみがあるのだと言う事があとで分りまして、どうも父親に対して碌でもない事を云つたなと、後悔した様な事があります。

ところが、私なら私が、この世の中に命を稟けて、こんなにして七十年以上生きていると、それは菊の十日間にたとえられる様なものでありますけれども、そこは如何ばかりお手間かゝりし菊の花、でありまして、その如何ばかりお手間かゝりしという、そこに今申しました様な久遠劫の因縁というものがある。決して一朝一夕の事じやない。実に自分は忘れているけれども、遠い〳〵昔からの因縁とい

うもので、自分がこう云う風に生れて、七十年以上も生きている。その遠い因縁というものを一向感ぜずに、ただ自分の七十年の生活をただ楽しむということでありますなら非常に浅薄な生活になるという様な事を感じます様になりましたのであります。

それは矢ッ張り今の法華経の上でそういうことをお説きになつている。それをだん〳〵噛みしめていつて、如何ばかりお手間かかりし菊の花の句の意味がだんだんと深くなつてまいりましたのであります。

報恩品のこと

まあそういう風に法華経からは、その他色々と教をうけていますが、法華経の次に、私が教を受けましたのは心地観経の報恩品であつたかと思うのであります。この報恩品の、父母の恩、衆生の恩、国王の恩、三宝の恩という、これを非常に有難く頂く様になつたのでありまして、昭和十年の一月下旬でありましたか、放送局から頼まれて、広島から全国中継でこの報恩品のことを、毎朝十日間ばかりお話したことがありますが、そのずーと前から報恩品に親しんで居りますのであります。もつともこの報恩品には三宝の恩と云つてなか〳〵むつかしいことが云つてありまして、そんな所はよく分つたわけではありませんが、父母の恩、衆生の恩、国王の恩というところは非常にわかつたような気持で、有難かつたのであります。

だん〳〵読んで味つて居りますうちに、父母の恩、衆生の恩、国王の恩と並べてあるけれども、この根本は父母の恩ということを感ずる様になつてまいりましたというのは、この衆生の恩というところを見ますと

「一切の衆生と云うものは今迄の長い間に互に父母となる。だから一切の男子は慈悲ある父であり、一切の女人は慈悲ある母である」

ということが云つてあるのでありますが、これがなか〳〵分りませんでしたけれども、今の様に、自分の存在というものが、塵点久遠劫の前からの久しい因縁の結ばれた結果であるという事になりますと、何等かの形で、今の同胞と言つて居りますお互が、或は父となり子となり、或は母となり子となつて来たかも知れないと、仏教でそう教えられるのは、確かにそう云う感じを云われたのである。そうすると御恩ということは、父母の恩というものが飽くまでも根本になる。国王の恩のところを見ましても、国の大王も群生を、同一の子の様に思われて、その多くの人々を守つて行きたいと言う心が、昼も夜も息むことがない。こういうことが述べてありますから、その国王の恩と云つてもその根本にその現れというものが父母の恩ということの現れである。父母というものが飽くまでも根本であるということを少しづつ感じますようになりました。

母の慈愛の徹底の話

ところが、それについては以前にお話申上げたか知れませんけれども鳩翁道話の中に、母親の慈愛故に、何とも云えない不良な息子が、すつかりあらたまると云う有難いお話があります。私、鳩翁道話を何で読み始めたか。考えてみますと、私が昔の中学の生徒でありました頃に、母が鳩翁道話というものは大変に面白いものであると言うことをよく言つて聞かせましたので、それから読んだと記憶いたします。ところがその鳩翁道話のいろんなところに面白い、為になるお話が一杯ありますけれども、その中で私が繰り返し〳〵読んで何時も涙が出そうになるお話というのは、今の不良の息子が、母親の慈悲で攻まつたというお話であります。

これはその父親や母親の一人息子でありまして、非常に可愛がつて育てた。あんまりただ可愛がるばかりで育てましたので、息子が段々我儘が増長して来て、青年期になりますと不良性を大いに発揮する様になります。喧嘩する、隣の子供の手を叩き折つたとか、足を折つたとか、そんなところまでいく。それから博奕を打つ、悪所通いはする、大酒は飲むということで仕様のない不良になつて、二十六歳になつたと云うのであります。そうすると村の人達が困つてしまつて、あんなのが村に居ると皆が非常に困つた事になる。ひとつあの両親にあの子供を勘当させて、この村から追つ払つてしまおうという相談をしまして、いよ〳〵その書類をこしらえて、或晩その両親の所へ代表者、親類もありましようし、知人もありましよう、その代表者が、畳の上に丸く座をとつて、今夜こそはお二人に、この子供を勘当して、この村から追い出すという証文に判を押して貰わなければならぬ、と、そういうことになるのであります。

そうすると、その不良の悪友共が、

「オイ、お前は今夜いよ〳〵勘当されるそうなが、勘当されたらお前だつて困るだろう」

と云うと、その不良の息子が、

「イヤ、勘当か、面白いことになつて来たぞ。いよ〳〵親爺が俺を勘当することになつたら、その場に踏み込んで行つて、勘当料をくれと云つたら、八十両や、百両は手のものだろう（昔の八十両、百両は今で云えばなか〳〵でありましよう）それじや一つ前祝に大いに酒を飲もうじやないか」

と、茶椀酒をどん〳〵飲んで、すつかり酔っぱらつて、着物をハシ折つて、家の方へ飯つて行く。急に一度に飛び込んだのではいけないから、庭の方から様子を領つて、いよ〳〵

親爺が判を押したら雨戸を蹴破つて、飛び込んでやると、そういう気で、縁側の雨戸の隙間から見ている。

皆が円座にならんでいる。いよ〳〵勘当するという証文が親爺の前に廻つて来る。そうすると、「印形を持つて来て呉れ」と云うと、母親が箪笥の小引出から、判を入れた袋を取り出してくる。息子の方では親爺があの判を押したら飛び込んでやれと、待つて居るのであります。

勘当しない親

いよ〳〵親爺さんが判を押そうとする時に「一寸待つて下され」とその手にすがりついたのがお母さんであります。

「あの子をこのままにしておいたら、この家屋敷もすつかり売払う様なことになりましようし、二人はあの子のあとへついて乞食をして歩かなくちやならぬ様になるかも知れませんが、それでいゝじやありませんか。あの子を勘当したら、あとに養子をしなければなりません。それがいゝ養子が来てくれれば、いいけれど、どうも子供というものに、不仕合せな自分等の事ですから、養子が、屹度いい子が来てくれるとはきまつたものじやありますまい。どうせ駄目になるのなら、この自分の腹をいためた子のあとについて、おしまいには野倒死をしてもいゝじやありませんか。どうぞ五十年に一度のお願い。どうぞその判を押すことをやめて下さい」

親爺さん、しばらく考えていましたが、たちまちその判をもとの袋に収めてしまいきして、皆の衆に、攻めて御辞儀をして

「まことに、相済みませんが、今婆さんが申しますことが本当だと思いますから、もう勘当は致しません。いずれ私共が困つたら貴方がたに御無心でも云いに行くかと御懸念もありましようが、そういうことは決して致しません。明日からはすつかり絶交して頂きます」

そうするとお母さんがそのことを聞いて、嬉し泣きになき出す。お父さんも男泣きになき出す。

慈悲が染みとおる

その有様を見たところの不良息子、臓物の底まで何とも云えないものがしみこんで来るのであります。即座にその息子が、親というものは有難いなんか思つたわけじやないけれども、何とも云えない思いが臓物の底までしみこんで来て、居ても立つてもいられない。その場に倒れて、袖を咥えて泣き声を出さぬようにして泣いている。これが大慈大悲がその不良息子に通つてひびいたのであります、とその柴田鳩翁は云つて居ります。

転向

それから息子の方は改めて立上つて台所の方に廻つて、

下座からそのお座敷の方に出て来まして、皆に丁寧に御辞儀をして、

「今晩はいよ〳〵私が勘当されるそうでありますが、いよ〳〵勘当ということになりますと、淋しくてたまらんようになりました。どうぞ御願でありますから、皆さんから親爺とお袋に、私の勘当を三十日間日延べして貰えるように願つて下さいませんか。その三十日の間に私が改まらなかつたならば、改めて勘当されても宜しい。どうぞ三十日日延べして貰えるよう願つて下さいませんか」

とたのむのであります。皆の連中は困つていたところでありますから、ちつとおかしかつたけれども、親爺さんの方は勘当せんと言つていたところに、三十日の日延べというのも可笑しいけれども「あんなに息子さんが云われるのですから、どうですか」というような事になつて、親達は無論勘当せんと云うのですから喜んでいる。集つた衆は、息子に向つて

「これから随分、孝行さつしやれ」

と云つて別れて行くのであります。

この時からこの不良の息子がすつかり改まりまして、非常な模範青年になつて、村のために非常によく働く様になつて、とう〳〵その筋からお褒めを頂いて、昔の事ですから、庄屋とか云う役目を頂く様になつて、それから三年ばかり後に、そのお母さんが病気になつて今度はいよ〳〵駄目という事になつた。

死ぬる母親の言葉

その死ぬる前に息子を枕許に呼びまして「いつぞやのあの集りがあつてから、何と思うたかお前がすつかり改まつて来た、有難い。昔のお前のまゝで、今自分が死ぬるならば自分は地獄へ行くより仕様がなかつたろうが、お前がすつかり改まつたおかげで、自分は死んでも極楽に行くよ、有難う」と息子をおがみながら死んだ。

そこを読んで来ると、私は何時も涙が出そうになるのであります。お母さんは、自分の慈愛故に息子が改まつたということを知らんのであります。何時ぞやのあの集りから何と思うたか、お前が改まつてくれた、有難う、と云う。

そうなつてきますと、矢ッ張りそのお母さんを通して、仏のまことが、その不良の息子にとおつたのである。響いたのであると、こういうことになりまして、そのお話というものが仏教の上から云えば非常に深い味いになる。お母さんは自分のやつたことを知らない、仏様のお慈悲の縁になつたのである。このお話は非常に有難いのであります。

親の恩は仏の御恩

よく鳩翁道話をもう一度読んでみようと思う時に、大低そこを開いて見ます。又鳩翁の言葉遣いも面白いのでありまして、それを読みますと、お母さんの死ぬる時の言葉というところまでゆきますと、どうも涙が出そうになつてまいります。そういうところからであります。父母の恩といつても、それは久遠劫来の仏の御恩である。それだから、父母の恩が根本になつて、衆生の恩というのも、もと〳〵は父母の恩である。国王の恩というのも、もとは父母の恩である。父母の恩で統一されている根本が父母の恩である。こういうことをだん〳〵感じますようになりまして、そうなつてまいりますと、この報恩品というものが、非常に有難いのでありまして、この経の三宝の恩というところは相当難しいことが述べられてありますけれども、今の様に感じてまいりますと、三宝の恩というものが、父母の恩の根本になつている、父母の恩というものは単にこの世の父母の恩というのじやない、絶対の御恩である。そうなつてまいりますと、仏教で言われるところの御恩というものは非常に深いものになるのでありまして、私共が普通使つている言葉、あの人にはこれ〳〵の御恩になつているから御恩返ししなければならぬ。……これは普通の使い方であります。ところが仏教で言われるところの御恩というのは何とも云えない深味を持つていることであります。そしてこの三宝の御恩というところを読んでまいりますと、この御恩というものは、有始無終、始めあつて終り無き御恩であるとなつて居ります。

有始無終

有始無終ということを私大分考えさせられてまいりましたが、これは、矢つ張り、私なら私というものを目ざしての仏の慈悲のひびきなのでありますから、そこに始めありということになるのであります。私を目ざしてのお慈悲が私に響くということになりますと、そこは始めがある。無始無終と云わずに、有始無終。始め無く終り無しと普通に云うところでありますけれど、始め有りて終り無し。私を目ざして、私にお慈悲というものがひびき、私がお慈悲というものに目覚める。そこに始めがある。そしてその時のお慈悲というものが、永遠にひびく、それは無終である。こういうお言葉というものが味われて来るのであります。

これを大無量寿経で申せば、法蔵菩薩が願をおこして、兆載永劫の御修行を遊されるということが始めありと云うことであつて、その阿弥陀如来としてのお慈悲は、永遠に続くということに無終というところがあると、こういう風に云うべきところでありましようけれども、それがであります。その慈悲というものが私なら私にひびいて、私の心の目がさめるという、その時から始まるのでありますから、法蔵菩薩の兆載永劫の御修行も、その時から感ぜられ始めるのでありますから、だから、この有始無終という言葉に味いがあるということを感ぜられますのであります。

このお言葉は私前から、これはどういうことであろうかと思つておりましたが、そういう風の味いのように思いますのであります。兎に角、御恩ということを殊に報恩品においては徹底的に述べられている。それが私なら私の上の味いとなりますと、今の不良の息子の改心ということの上でも味われます様な仏のお慈悲というものが、母なら母の縁というものによつてひびいて来る。母を縁としてひびいて来る。これは私共が親が生きている間は、随分我儘を言つたりして居りますけれども、親が死んでしまいますと、それきりのものでなくして、親というものがもうすこし近くなると云いますか……

親の死の縁

私が長い間お育てをうけました臼杵祖山先生の仰言つたことでは

「親が死ぬる時には、その親の全生命というものが、その子供は六人あつても十人あつても、その一人々々の子供に入りこむのである」

ということをよく仰言つて下さつたのでありますが、それが非常に味いが深いと思うのであります。

実際親が死んでしまいますと、親との交渉が非常に近くなるのであります。もつとも人間の情としましては、嬉しい事や、悲しい事がありますと、その時には死んだ親を痛切に思い起しますけれども、それのみならず、親というものが、私の上に生きているという感じは、親が亡くなつて後であります。でありますから、私のことを申しますれば四十歳越えてからそろ〳〵親というものがわかり始めた。母が亡くなつて十年余り過ぎている。父が亡くなつて五年余りも過ぎていると云う。その時から親というものが分り始めたということを、私よく申しますのでありますが、臼杵先生のその言葉によつて、親が亡くなつてから、一層子供の上に生きているのである。こういう感じであります。

阿闍世王のことを伺いましても、あの阿闍世王がいよ〳〵苦しみ、こわがつて、耆婆大臣と同じ象に乗つて釈尊の御涅槃の場へ行く。あの時に、空中に声が聞えるのでありましよう。空中の声は「仏は今なくなろうとしておられる。邪見六臣の言葉に従うことなかれ、耆婆の言葉に従え」という様な声がひびいて来る。阿闍世王はびつくりして、空中の声は何でありますかと聞くと「我はビンバシヤラ王なり」という様な声が聞える。これは阿闍世王がまだ父の生前に何かふと聞いて居つた、それが今の場合に生きた声として心の底からひびいて来た、それを空中の声とお

経では言い現してあると、こういう風に私は味つているのでありますが、実際そういう風で、亡くなつた親の命のひびきというものが、今度は亡くなつた後に、子供に生きてひびいて、あるいは蘇つて来る。そこに父母というものと、仏の働きというものが一流れになつている。仏は仏、父母は父母というのでなくして、父母というものが、この上ない仏のお慈悲の縁である。又仏の智慧の縁でもあります。私なども父母が生前に色々言つていたことが、その時には一向解らなかつた。親が亡くなつてから後に、あの時の父の言葉の意味はこういうことであつたな、という様なことを段々と生きて味うようになつてくる。だから死んだ親というものが一層自分の上に生きてくるというのは、そこに仏の命のひびきというものがそこにあるからである。こういう心持であります。

そして、今の父母の恩というものがどこまでも中心になつて行く、心地観経報恩品の味いというものを、そういう風に私が感じましたところから、若い時から読み始めた報恩品が段々年とつてまいりますと、すこしづつ深く味える様になつてまいりました。これは非常に有難いことであります。

大無量寿経

そういう風に申してまいりますと、私の親しんだ仏典というものは、その他にもあるのであります。こちらで五年間続けてお話をさせて頂きました大無量寿経なんかも、私が親しんで居ります様に、大無量寿経の下の巻の方が最初に私にひびいて、ことに五悪段というところが、あゝ自分はこの通りの人間であるという所に目がさめ始めまして、ずうつと後になつて、上の巻の法蔵菩薩の四十八願、浄土の荘厳というものがいくらか分るようになつてまいりましたのであります。これは私にとつて大事なことを深く教えて下さるお経でありまして、今までにもなか〳〵読み足りていないのであります。昨日でありましたか、朝日新聞を見て居りますと、三角寛という方でありますか、作家の方だそうであります。その方は、真宗聖典一冊が自分の繰り返し〳〵頂いている大事な本である。九州などへ汽車に乗つて行く時でも聖典をひらいて読んでいると、長い汽車の旅も、非常に短い気がする。そして五悪段を主にして小説を書き始めたが、始めの方をすこし書くのに長い間かかつた。とに角自分は真宗聖典が唯一の深く味つている大事な書物であるということが出て居りました。私なんか真宗聖典をくりかえし〳〵味つているなんか、とても言えない。私は色々な方から御教を頂いたところを、とび〳〵に味つている様なことでありまして、なか〳〵その方なんかに及ばないと

いうことを感じますのであります。

そういうことでありますから、大無量寿経なんかも、まだ〳〵私の大いに味いが出て来なければならんはずであります。五悪段なんかも、丁度上の巻がすこし解るようになりましてから、あの五悪段のお言葉というものは、親が目に一杯涙をたたえながら「お前にはこんな悪いところがあるぞ、あんな悪いところがあるぞ」と云つてくれている。そういう味いのものであるということを大分後になつてから感じます様になりました。

「お前はなか〳〵わるいところがよくならんだろうが、お前自身にも気がついていないだろうが、かような悪いところがある」

と涙ながらに親から教えられている、そう云う感じになつてまいりましたのであります。実際、私自身の事を考えてみますと、若い時には、こんなことは自分の罪とは云えないと考えていたことが、だん〳〵、あゝこれも自分の罪であつた。またあやまりであつたと云うことを、この年齢になりますと感ずるようになりました。

或禅宗のお坊さんがいよ〳〵死ぬる時に

風繩雪井七十七年、転身回顧すれば、
禍犯天にわたる。

と自分の七十年というものは、風を繩で捕えようとしたり、井戸を雪で埋めようとしたり、ちつとも役に立たぬことをし続けて来た。そして今死のうとする時に自分の心で我身をめぐらして、今まで七十七年のことを考えて見ると、自分が犯した罪禍というものが、天一杯になるほど深い広いものである。

私が若い時にこの偈文を知りました時には、このお坊さんはちつと誇張したことを云つていらつしやる。禍犯天にわたる、あんまり云いすぎてあると思いましたが、今この年になつて、自分の来し方のつまづきというものを考えて見ますと、確かにそのお坊さんの仰言る通りであつて、禍犯天にわたる。自分のあやまち、犯した罪禍というものは天一杯にひろがるようなものであると云うことをだん〳〵感ずる様になりました。

つまり自分には悪い事だとなか〳〵自覚が現れて来なかつたことが、仏様の教を通して、あゝその通りだということがだん〳〵分つてくる。こんな次第であります。そうでありますから、この仏典の味いというものは何時まで行つてもつきるところがないという様なことでありまして、私は今から何年生き延びますかわかりませんけれども、生きのびる限り、また味いが加つて来ると思いますのであります。それでは今晩はこれで。

（完）

昭和三七、六、十五日、

堂の鈴（十）

佐藤強三郎

帰命（二）

一郎はその夜おそく自分の部屋へ帰り寝ころんで居たが、思い出したように、温泉へ入つたり、出たり、酒を飲んだり、止めたり、身体の始末に困り抜いた。

翌朝、眼をさましたが、まだ思が追つてくる。

〈…右か左か。逃げるか戦うか。勝つか負けるか。〉

朝から酒を呑んで、チビリ〳〵一人で、飲むでもなく、呑まぬでもなく。うまいでもなく、まずいでもなく、ただ盃を上げたり、下げたりして一人思案にふけつた。

だれも来ない、だれも寄せつけない。部屋は静かだ。湯に入つて来て、また昼寝をした。

目をさませば酔も大分さめていた。持つて来た『三時間で達人になる法』という本を見た。

昔江戸（東京）に剣道の達人があつた。

その頃、江戸にも、試斬とて物騒なことが行われた。それは武士が刀を買入れた時など、その切れ味を試めすために、辻に立つて人を斬つて見ることである。

ある冬の夜、一人の強い武士が、江戸城馬場先門前に、新刀の試斬をやろうと、暗闇に人を待つていた。向うから弱そうな武士が来た。エイ！とばかり飛び出して、二三合真剣をもつて立合つた。

すると相手の武士が

「暫く、暫く」という。

「何ぞ」

「御顧が御座る」

「逃がせとか？」

「いや、決して逃げも、隠れもいたさぬ。拙者も武士で御座る。今、余儀ない事情がある。用が済むまで、三時間ほど待たれたい。その後はキット参ずる。間違いなくキット！」と弱い武士が頼む、強い武士は、

「そうか、刀の手前、勝負は三時間ほど待つてやる。キット来るな」と言えば、相手はうなづいた。

それから直ちに弱い武士は、さる達人の許へ一目算に飛んで行つた。大先生は稽古をすませて、一盃かたむけて居た最中である。そこへ突然武士が夜更けに尋ねて来た。名

を聞かせたが、知らぬ者である。

「今酒が始まつたばかりの大事なところ、そんな者は追い返せ」

と断つたが、頑として帰らない

「生命をかけて、お願い致します」

という。それじや、と道場へ通した。

双方は、中央で目礼して、しばらく談合、大先生は、急に奥へ入り、真剣勝負の扮装で出て来て、弟子共に、

「全部退散せよ。見ること厳禁」という。

広い道場には、ただ二人だけ……。

やがて真剣の鞘を払つて、厳かに構えた。

エイ、オウ、と一二度声がしただけ。後は静か。

この間、三十分もあろうか。弱い武士は道場を出るが早いか丁寧に一礼して、飛ぶが如く帰つて行つた。そしてさつきの馬場先門前の場所へ来たが、約束の時刻よりも三十分も早い。

待つ間、程無く強い武士が

「ヤア、貴殿は約束を違えず、三十分も早く来たとな。そんなに早く死にたいのか」

と大威張り、弱い武士は

「サア、試斬をして下さい」

何を小癪なと、サラリと大刀の鞘を払つて立ち合つた。両方共に、真剣に構えた。

「エイイ」「エイイ」とかけ声。

弱い武士は大刀を大上段にふりかぶつた。動かない。どちらも動かない。ジーと向い合つて互に動かない。

暫くする内に、弱い武士は、顔からポロ〳〵と油汗を出して来た。冬だというのに。

〈今、打つて来るか。……来るか〉

と、心を沈めて待つているが、来ない。どうしたのか。サツパリ打つて来る気配がない。

……こんな筈はない。さあ来るか。……やつぱり打つて来ない。顔も身体も汗が流れる。流れる。

やゝしばらく経つて、ガチヤリと刀を下に置く音がする。ハツとして、眼を開いて見ると、強い武士が

「調許し下さい。お見それ申しました。失礼の段、平に御容赦下さい」

と、頭を下げている。弱い武士はそれを見て〈なんだ、孤にだまされたようだ〉と、キヨトンとしている。強い武士

「拙者は、これまでに試斬を何人かやつて見たが、貴殿の様に強いお方に出会つた事がない。いずこの何某と仰

せになるか。サゾ〳〵天下に名の聞えた御方で御座いましょう。失礼の段、平に御容赦願いたい。何卒御尊名を伺わせて下さい」と言うと、弱い武士は、

「拙者はほんとに弱いもの、名もなき一介の武弁、名告る程の者では御座らぬ。恥しい者で……」

「いや、さにあらず、御謙遜を」

「いや、若輩」と切りがつかぬ。弱い武士は、

「実は、三時間の暇を貰つたのは、剣道の大先生を訪問するためで、死に方を聞いて来たので御座る。自分には何を聞かれても返答が出来ぬ」

それでは、と二人は、夜中をもいとわず、前の高名な大先生を訪ねた。

そこで大先生が、二人に申さるるには、「先刻、突然見知らぬ武士が夜中に訪ねて来た。そして〈拙者は今試斬に会いました。立向つた所、先方は剛の者、到底勝ち目がない。そこで、どうせ殺される位なら自分はこれでも武士だ、非人とは違う、殿様の手前もある。何とかして武士らしく立派に死にたい。この期に及んで教えて下さるは、大先生あるのみと思いついた。何卒御指南に預りたい〉という。

……面白い武士だ。立派に死にたい……という。今日まで大勢の者が指南を受けに来たが、どうすれば勝たれるか、どうかして仇を打ちたい、という者ばかり。今度の武士は珍らしい。よし、それならば、特別に秘術を教えようと云えば、死んでも必ず教えられた通りやります。と誓つた。

そこで本当に僅かの時間で教えてやつたのだ」と。

それから、夜半ながら、弟子一同を急に道場に集めた。やがて一同が整列するのを見て大先生は、おもむろに、

「……弱い武士が、立派に死にたい、という。

……これで、腹は定まつている。……。

みんな生き度い〳〵と、あせるから腹がすわらぬのだ。そこで、刀を抜き、気合をかけ、エイイ、と互に大上段に振りかぶつて、真剣を持つて教えた。

眼を閉じよ。開けるな。決して動くな。

ヒヤリと、感じた瞬間

全身の力を一刀にこめて、真直に打ち下ろせ。

……そうすれば相打ち位にはなる。と抜身で指南したのだ。眼を閉じさせたのは、開けて居れば先方が見える、見れば気が散る。どうせ、死を覚悟したのだから、見ることはいらぬ。

身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ、というが、身を捨てねば、浮かぶ瀬は無いのだ。

相打ち位には、キツトなる、と教えたら、相打ちになれば本望です、と、よろこんだ。

見ろ、相打ちどころか、勝つて大先達になつて、この道場へ来た。さもありなむ」

と、一同を見渡した。

己上。

……　……

一郎は読み終つて考えた。

〈あの本を借りた頃、信哉さんが教えたことを思い出す……昭和の今日と雖も、武士ならぬ、辻斬り、試斬りがどこにも絶えない。突然、金の刄、権力の刄、色の刄、義理の刄、を以て、斬りつけて来る。然し剣道修業、人道修業の道場は到るどころにある、探せば指南役にも事欠がぬ。責任を感じ、真実を重んじ、死を決して、大上段に構えて、正道を踏んで進む外はないでしよう……この真実の構えこそは解決の態度でないでしようか〉と云うのであつた。

……　……

弱い武士とは自分。強い武士とはお小夜、敵は色香と云う恐ろしい刄を以つて斬りつけて来る。色香に弱い身は色魔には叶わぬ。

然し、自分は正しく生き度い。立派に死にたい。それをやり遂げるには、如何なる困難にも耐え不名誉をも忍んで、妻お藤と正しく暮し、両親の老後を養つて行く外にない。これが正道である、そうだ、お小夜との縁は邪道である。

毎日々々何れとも決しかねて居ては、しまいに病気になり、人に笑われる様になるかも知れぬ。ままよ、人に笑われる位なら、妻お藤の許へ帰つて笑われよう。

どんな病気になろうが、どうなろうが、唯一つ、無碍の御慈悲を仰いで行こう。真実は一路だ。……

ああ、俺は家へ帰ろう。妻お藤の許へ帰ろう。そう定めた。ああ、自分は今度こそ、意を決して実行に移さねばならぬ。お小夜がどんなに店に来て暴れようが、情死をせまろうが、新聞に出ようが、一切見ないことにしよう。聞かないことにしよう。＝眼を閉じ、大上段に構えて、逃げまい。動くまい。機到らば打込もう。これぞ達人が教えた構である。間違いと知つたら、直して行こう。弱い武士は、助からぬと覚悟を定めた時に、どうせ死ぬなら、立派に死にたい、と願つた。死ぬことを避けようとはしなかつた。＝死を決して進んで戦かつたのだ。……あのお小夜は、いよ〳〵となれば情死しようと迫つて来るだろう。逃げようとすれば、恥も外聞も忘れて、無分別に切り込んで来るであろう。

自分は、いよ〳〵覚悟を定めねばならぬ。

…ああ、信哉さんの顔が見える。悪人をどこまでも呆れない、誓願不思議にひかれて、世のあざけりをも忍び不名誉にも堪えて、生きて、力の限り真実を尽そう。お藤と真面目な生活を送ろう。そうだ、真実は一路だ。生命がけで進もう。死ぬのは止めた、止めた」

……　……　……

もし途中で、気の弱い自分は挫けて迷い込み、神経衰弱にかかり、世に笑われ、人に嘲られ、妻お藤にも笑われる様になるかも知れぬ。

然し幸にも、その虚仮不実な、極重悪人を哀れんで、どこ〳〵までも呆れ給わぬ、不思議の本願を聞いたのだ、無碍の大悲を聞いたのだ。

その誓願一つを信じて行こう。そうだ！

死に様はよし如何あらんとも凡夫われ
唯、御仏の誓にまかせて
あゝ、唯この御誓一つあれば満足である。〉

と深く心に決した。

急に『歎異鈔』を取り出して拝読した。

第一章に、

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏もうさんとおもいたつこころのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり。弥陀の本願には、老少善悪のひとをえらばれずただ信心を要とすとしるべし。

そのゆえは罪悪深重、煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆえに、悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえにと、云々。

ことに最後の段、「しかれば、本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆえに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえに」と仰せられてある。

善をほめ、悪をしりぞける五分五分のこの世では、悪いものは呆れられるに定まつている。

いかに親切の親でも、妻でも、こちらが悪く、いつまでもその悪い事がやまぬ極重悪人ならば、遂には皆が呆れて、離れるほかない訳だ。それは限りある人生では当然の事である。……悪人と離れなければ、自分自身の身が立たなくなるからである。

しかるに、意外にも、その悪いものを憐れんで、どこまでも呆れない、捨てない、助け遂げずんばおかぬ、という本願を聞いたのだ。ああ、この不思議の誓願を聞けば、それ一つで満足である。

一郎は、人を離れて、仏に帰命した。

『歎異鈔』第二章に、

親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり。念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん。総じてもて存知せざるなり。

たとい法然上人にすかされ（あざむかれ）まいらせて、地獄におちたりともさらに後悔すべからずそうろう。

そのゆえは、自余の行（念仏より他の行）をはげみて、仏になるべかりける身が（なるはずの身が）念仏をもうして、地獄にもおちてそうらわばこそ、すかされたてまつりてという後悔もそうらわめ。いずれの行もおよび難き身なれば、とても地獄は一定すみぞかし……」

とある。

一郎は思う。〈自分は忘れてしまうことも出来ず、家業を専心にはげむ事も出来なかつた。地獄必定の者である。そこへこんな放逸不実なものをあわれんで、どうなろうと、どこまでも呆れぬ、助け遂げずんば置かぬという念願を聞いたのだ。もしこの本願にあわずば、地獄は一定すみかぞかしである〉と感じ、唯いいる様に『歎異鈔』を読んだ。

その夜、信哉を訪ね、一郎は

「明日、直江津へ行くつもりで御座います」

と云つた。そしてゆつくり温泉に入つて寝た。

善き一夜

過去を追わざれ　未来を待たざれ
過去は過ぎ去り　未来は達せらるることなし
ただひたすらに　現在の法を止観すべし
今日熱心になすべきをなせ
誰か明日死するを知らんや
かくて死魔の大軍の　禍なかるべければなり
かく熱心に撓まず　日夜に住するを
『善き一夜』と　釈迦牟尼は説き給えり。

一道会の記（五）

榊原徳草

昭和三十七年十月二十八日午後一時から例年の通り池山栄吉先生の一道会を当山浄住寺で開催させて頂いた。今年は四国の松山大学文学部の教授であり曽ての京都親鸞会の先輩の松本解雄先生が仏教青年会の学生八名を連れて参会されることになつており、この一団の人々は会の二日前から奈良・京都の仏教史跡研究を兼ねて当寺に逗留宿泊することに已に決定して居つた。それで私の所では当日までの準備と松大仏青の人達の一道会への盛り上りのための行事とで多忙やら歓びやらで、いつにない緊張と期待に一道会を迎えることになつた。松本先生は一日中奈良へ学生を連れていつてきて夜は歎異鈔の講話、朝は学生一同と仏前に三帰依文をあげ宗歌を奉唱し朝食をとる、といつた工合に、松大仏青の三日間の講習会のような行事となつた。私も一夜はお話をさせられ白隠の求道の様子を禅と浄から味いながら学生達の宗教的情懐の盛上りを御手伝いした。また暁闇の起床同時の坐禅も本堂で行い、警策も廻して、約一時間程静座的ながら学生と共に坐つた。

これは私見であるけれども、来年からは、二三日前から安居のやうな形にして、例えば白井先生を講師にお願いするとか、希望の人々を募つて当山でそんな一道会を開催してはどうか、そんなことを思つたりしたことがあつた。

さて当日は松大の学生始め近角先生に深い御縁の大字様兄弟、加藤さん。九州の吉田さんの顔も見え、更に大阪の福原さん、愛知の三輪父子、山梨の村上さん、其他竜大、京大の学生さんの姿徳島から小川はぎのさんや東海、近畿各地から五十余名の参会となり、まことに「浄土の興行」が盛大に催されたのであつた。花田先生御夫妻は恙なく名古屋から、東京都大学教授御夫妻は九州の学会を終えて飛行機で急遽参会、向島竜大教授、井上兵庫農大教授、佐々木東山女子大教授、中井先生、川畑京大教授など親鸞会の先輩同人と自照舎の先生方、それに白井先生や芦屋の渡辺範介先生、又今年は石川興三京大名誉教授で現東山女子大教授が初参会された。その他例年の通り芦屋の梶井夫人ならびに月例会の人々、奈良から服部安司君の夫人や川本好子さん、福本慶子さんを初め奥様達の中には昔の奈良女高師時代の無憂華会の旧いお友達などがおられた。

池山先生の御念仏を、この耳に聞き身体に植えつけられて幾星霜かを或は先生と共に、或は先生を講壇上に、御自宅に、坐談会に拝して温容に浴し心光に接し、そんなにして撫育長養の恩恵を蒙つた人々、そうした愛育拝顔の温室が消え去つて師の浄土に還帰ましませしより、遙けくも二十五回忌の一道会に参集した曽ての師の膝下の人々の青年の姿は白髪をまじえていよ〳〵人生の夢を失いつゝ、それなればこその「池山におきては、只念仏して」の一語がますます〳〵吾身にしみこみ、如来の真実が現り〳〵と「愚身の信心におきてはかくのごとし」と仰がれる、だから年をふりへだてるほどに先師の徳をしのばずにはおれない。阿修羅の鼓は打たざるに鳴り響く、念仏はその念仏自身の加威力により自動作用して止まない、光明照らして不断光仏と名づけたてまつるごとく、断え間なく無碍光仏が私の中で働き続けて、次から次へと光を増し、その徳化は四方にひろがり、あの人にも此の人にも伝わつてゆく。

こんなに独りよがりのような一種の興奮を覚えて書きたくなるのは、先師御往生されて四半世紀という長い年月がそして又昨日の如く思われて今日の二十五回忌を迎える、お念仏の信感から云えば今現に在すが如き、又時間の上から振りかえつてみればまぎれもない二十有五年の長い年月を過ぎて今日に至つたのであるが、一口に言えば今と永遠とが交錯し織り作してその二つの面を一つに包み、恰も海綿に水の滲むように、昼夜不断に且つ現に、有情を呼ぼうて乗せて止まない大悲の加威力に頭が下がるからである。

実はこのように二十五ケ年が私には淋しいことの積み重ねであつた昨年迄の実感が、今年は一時に払拭されて心に花が咲き身体にも賑わしいものが湧き出ることが出現したからである。それは、今年の一道会には先師の御長男池山寿夫氏御夫妻と御愛嬢が初めて御参会になつたことがあるからである。

池山寿夫様が当寺の先師御霊前に参拝されるとの御通知が突然花田先生からあつたのは、会の一ケ月程前だつたか。

私は初めてお目にかゝつたのだが、御姿は先師そのまゝである。咳をされたがその声も同じである。御年輩も恰度私が先師に引き合された御年齢に似通うておる。拝顔するなり懐しさと驚きとで、夢と現とのけじめもわからぬほどであつた。寿夫様が私に先生と呼びかけられると先師が私に常不軽菩薩となつて現れた如くにギクッとするのである。角の生えた親牛に犢子と変化身を現じて浄土から還相された先師ではないかと怪しむばかり。私は胸がおどり有難さに涙が流れた。もうこれで淋しくはない、先生が再誕したのだ。「只念仏して」＝たのもしさ＝が現に私の前に

働いている、そうとしか感ぜられなかつたのである。

感情の面からこう私は述べたが、この感情の源を静かに眺め、よく〳〵案じてみれば、我々の小賢しき計らいには目もくれず如来は阿弥陀仏は氷河の如き威神極りなき大偉力をもつて常恒不断に時を待ち所を得て、所謂、無縁の大悲をもつて吾寺を度するに休息あることなし、の実現に襟を正すのである。

寿夫様の出現とほゞ時を同じくして、近角常観師の御子息はこのたび北海道の任地から東京へ転任されて、この前後に名古屋の花田先生を訪れられたとのことである。近角先生の御長男は日支事変で戦死されたが、その御出征の知らせが池山先師にもたらされたのは、丁度私の出征の知らせが先生の所に着いたと同時であつた、と私は出征の時に京都駅に送つて下さつた奥様から伺つた、そのために先師は一夜転々反側して熟睡されなかつたことを承つた。私には近角、池山両師の深い御法縁と併せてその御子息の出征のこと。又このたび、近角真観様は求道会館のある東京に帰られ、池山寿夫様は一道会館のある名古屋に帰られ共にお念仏される有難さに遭うことができた。「どこ〳〵までも御相手下さる御慈悲」の、「只念仏して＝たのもしさ」の二つで一つの南無阿弥陀仏が、再びこの地上に再現されようとしている、いや現にもう法灯は再び点つた、私等にはそういう感がしてならない、それが今年の一道会には私のみならず有縁の人々の身に感じられたことと思うのである。

会は例年のように私の阿弥陀経の読誦と「十方微塵世界」の掛け和讃、歎異鈔第十章迄の拝誦をもつて勤行を終りそれに引続いて、白井先生からお話を承つた。

白井先生法話

先生は、池山先生と親しい法友であられた近角常観先生の導きによりお念仏にあわれたことをのべられ、今日は松山大学の学生達が遙々参会になつたので主として学生達と話合いたい、聞いて頂きたいと若い人々への内に燃ゆる呼びかけをもつてお話が始められた。「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀に助けられまいらすべしと、よき人の仰せこうむりて信ずる外に、別の仔細なきなり」この聖人のお言葉の味いを述べさせて頂く、とのべられ、御自身の学生時代に問題とされた、人間と生れた意義は何であるかの疑問について悩まれたこと、結局それは人格の完成こそ人間としての真の意味であること、従つてそれは完成された人格であり理想の人間である。そこで三賢四聖等の「聖人を慕つてこれを辿ろうとし、最後に釈迦牟尼仏の導きに気づいた。

地上の釈迦は仏の生れかわりであり他の聖人たちと違つ

ていることに気がついた。釈尊に現れている仏の徳、大慈悲、仏の徳が釈尊の姿に人間の理想が人格の極致として現れておることが想われる。かの涅槃像の絵を拝するとその姿が現れている。人も獣も木も虫も凡てがその徳を慕いその徳に包まれている。これは聖人の徳ではない。仏の徳である。この仏の徳を、涅槃経の中の『一子地』でしのばせて頂く。

親鸞聖人は和讃に『平等心をうるときを一子地と名づけたり、一子地は仏性なり、仏性即ち如来なり』と仰せられてその『一子地』に左訓されて『三界の衆生をわが一人子と思う境地である』と仰せられる。吾等の思い及ばぬ境界であるが身にしみる御言葉である。仏は一切衆生の迷いをぬき悟へ導いて下さるお方である。人格の完成、この考えをのばしてゆくとそれは一子地の境地である。この境地が尊い高い他と比較にならない人生最高の理想の境地と知らされるが、それがどうなのか、私にどう関係づけられるのか。

親鸞聖人は教行信証の第一に『真実の教とは、大無量寿経これなり』と宣言され、『名号をもつて体となす』と言われる。この教、名号を体とするとの教と一子地という如来の理想境と、どうなつてくるのか。

涅槃経に、悪逆の阿闍世王は父王の罪なきに逆害を加えて殺害するが、これを悔いて日夜愧悩する、時に大臣耆婆の勧めにより釈尊の前に至つて教えを受けるのであるが其時に仏は『阿闍世の為に無量億劫に涅槃に入らず』との大慈悲をもつて大罪になやむ阿闍世に一つになつて下さる。遂に阿闍世は仏の大慈悲によつて『我今始めて伊蘭子より栴檀樹を生ずるをみる。伊蘭子とは我が身これなり、栴檀樹とは即ちこれ我が心の無根の信なり。「無根」とは我初めより如来を恭敬することを知らず、法、僧を信ぜず、これを無根と名づく。世尊、我れ若し如来世尊に遇わずば当に無量阿僧祇劫に於て、大地獄に在りて無量の苦を受くべし、』と阿闍世は如来の一子の如く憐憫してやまない大慈悲に救われる。また善星比丘のためには仏は地獄へ附き添つて堕ちて下さる。自ら代つて地獄の苦を負つて下さつてそれを苦にされない。また、犢子のように親牛の罪悪深重の凡夫につきまとつて離れない。このような如来の慈悲の姿は、涅槃経を通じて、人間の到達し得た最も深奥の境地を示している。

かかる如来の大慈悲を親鸞聖人は大無量寿経によつて感入しておられる。その聖人の心地、ここの感じ、三世の諸仏が一子地に立つて一切衆生に仂いて下さる。仏が一切衆生を斯く慈しむ気持がいかにして吾等に届いて下さるかを聖人は大無量寿経これなりとこの一経のうちに受取つていられる。

先生はここで聖人が大無量寿経を八万四千の仏の教門の中より「真実の教とは大無量寿経これなり」と特に吾がための仏の教えなりと受けとられたお味いを話される。

釈尊がこの経を説かれるとき、光顔巍々として威神極り無かつた、阿難尊者は驚いて常にない世尊のお姿に不思議の念を起して問いたてまつると仏は、如来は無蓋の大悲を以て三界を憐れみ給い、真実の利を以て群萌を救い恵まんがためであるとのたまい、ここに、法蔵菩薩の希有の大弘誓から四十八願が超発され、広く法蔵を開いて凡小を哀れみ、南無阿弥陀仏の名号が成就され、この功徳の宝が衆生吾等に施されること、釈尊がお顔色もつや〳〵と常にないおよろこびとこれを受けた阿難の驚きとは、まことにこの名号の宝の成就にあつたこと、ここの所を釈尊から法然上人へ歴代を通じて伝わり、親鸞聖人は御師匠法然上人のこのお名号を「親鸞におきては只念仏して弥陀に助けられまいらすべしと、よきひとの仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細はなきなり」とお喜びになられたこと、法蔵菩薩のよろこび、それは名号一つに成就した阿弥陀仏の喜びであり、これは釈尊の光顔に現れた瑞想に見る喜びであり、これを「親鸞におきては、只念仏して」の御喜びとなつて吾々に拝されてくる。三世の諸仏によろこばれた阿弥陀仏の名号の成就は、かくして、真如を一子地として与えたい願いの成就であつて、諸仏如来の与えたくてならなかつた一子地が、名号と凝り固つて聖人の「たた念仏して」の中に響いており吾等にもこの響きが感じてくる。大経の、法然上人の、親鸞聖人の、池山先生の御喜びが吾等に響いてくるようである。

人生の理想をただ認識して生きようとするのみでなくて仏の境界の一子地が、「只念仏して」与えられる、念仏で与えられる、苦悩の衆生の中へ名号として一子地の徳が働いて下される。

私の七十年の人生は悲劇にまつわられづめであるが、その苦悩の中へ名号となつて仏の一子地の大慈悲が働いて下さる。……云々。

白井先生は、このように、聖人が「真実の教とは大無量寿経これなり」御本典の最初に宣べられた御心を、この頃の深い御感懐をもとにして、若い松山大学の学生達にお伝え下さつた。これはほんのあらましである。

ここに来るまで

——一道会での挨拶——

池山寿夫

私、池山寿夫でございます。何から申上げたらよいのか、心に一杯で、人間の持つ言葉の不自由さをしみじみ感じさせられる思いが致します。

私は、昭和十八年の暮に交換船で帰国いたしましたが、終戦後、少し考えるところがありまして、一寸した縁、実は深い縁なのでございましようが、まあ人間の目から見ればいささかの縁に引かれまして、高知へ参りました。そして、結局高知で十七年間暮しまして今年の九月から名古屋の方に出て参つたのであります。

その前に南米から私が帰つて参りましたのは昭和十年の七月であります。その時は、外国で父危篤の電報をもらつてから半年もたつて居りました。すぐにも帰りたかつたのでございましたが、当時ペルーでやつて居りました私の仕事、邦字新聞の経営と東京朝日から頼まれていた仕事、この二つともに大事な問題がございまして都合がつかず、苦しい思いの半年を過ごしました。

間に合うか知らんと思つて帰つて来ましたら、幸に父は少し持ち直しまして生きていてくれました。それからまあ許される限り長くと思つていたのですが、結局半年の間、昭和十一年の二月まで、衣笠山の麓で父と心行くばかり一緒に暮しました。

当時、聖鸞寮で父を中心としたお集りがありました。但し私はそれには一度もお伴もせず、ただ一度、父が病軀をおして京都市の高倉会館で講演をした時に随いて行つただけでございましたが、若い人々に取り囲まれている父の姿を本当に尊くも思いましたし、又限りなく嬉しくも思つた次第でございました。

半年たつて、いよいよ再び行かねばならなくなつた頃、父の自慢の紅梅が庭でほころびかけていました。

「この紅梅は、とても綺麗なんだが、咲かないうちに行くんだね」

「えゝ、どうしても行かなければ……」

「そうか、惜しいな」

と、両方とも笑つて別れたのでありましたが、勿論二人と

も〈いづれこの次は、違つたところでお会いするのだね〉という思いを胸一杯に持ち合つて別れたことで御座います。その時父が書いてくれた色紙に

紅梅を見せで別るる恨かな

としてありました。これは今なお、私の筐底に在つて、私を温く抱きしめてくれます。ペルーを追放されて北米の収容所に移される時には、書類の携行は一切許されませんでしたが、これだけは持つて帰りました。説明したら向うの役人も納得してくれました。

こんな風に、当時から父を中心とした集いには余り出なかつた私が、父が亡くなりましてから廿五年、父と〈紅梅の別れ〉をしましてから廿七年にもなります今日、初めてこの一道会に参らせて頂きました。一道会の一番新入であります。どうぞ今後よろしく御交りの程をお願いする次第でございます。家内と、丁度家に居ります次女弘子も連れてまいりました。

先日、花田さんにお会いして「私は池山栄吉の長男で、栄吉の血で作られた長男ではありますが、心の長男は貴方ではないかしら」と申しましたが、その後榊原さんにこのことを話しましたら「いま、一道会の人々は皆、池山先生の心の長男を以て任じています」とのことでして、私は非常にうれしく存じました。定めし父は喜こんでいることと思います。

初めて一道会に伺いましたので、何だか父が〈お前も来たかね、皆さんに御挨拶しなさい〉という声が聞えてくるような気がしますので、今日に到ります迄に辿つた道を自己紹介の代りに聞いて頂こうと存じます。

私は南米ペルーで暮して居りました。始め父とは昭和元年に、三年行つてくると云つて別れたのですが、それが前後通じて十七年間になりました。大戦になりまして昭和十七年六月に私と家族（家内と三人の子供）は米国の軍艦によつて北米の収容所に移され二年近くの収容所生活を送つて前述のように昭和十八年の暮に帰つて来ました。この間、大変丁重に扱われたことは、他国からの引揚者の皆さんが言語に絶する苦心を強いられましたのと較べまして、申訳ない位しあわせだつたと考えて居ります。

それから戦後、東京から高知に移りまして初めの七年間は標高三百米の高原で一軒家の開拓生活をつづけました。が、結局その百姓生活は失敗に帰しまして、その後は亜炭鉱山の責任者として高知市生活を送りました。

私の辿りました人生は、時々、四十五度や九十度は愚かなこと、百八十度近くの転換をするような変化を見せてまいりました。今度の名古屋入りでもこの例に洩れませんが、其間、勝手放題に途を選ぶ私に、家内はよくついて来

てくれましたし、三人の子供も伸々と苦労を一緒にしてくれました。

子供は三人とも向う出来で、交換船で帰国しました時には、長女が小学校一年生、次女とおとんぼの男の子はまだ日本語も充分話せないような状態でした。

親になつて見ると、始めて親のことをよく思い出すようになります。若い時から外国に飛び出して、普通の意味では何一つ父をよろこばすことの出来なかつた私を、自分ではつきりと知るようになつたのは、私に子供達がめぐまれてからでした。そして子供を育てることの中に、父に仕えるような気が致しまして、岐路多き過し方ではございましたが、それだけは一生懸命にやつて来た積りで居ります。父が励ましてくれたように思われます。

敢て言わしていただきますが、私は断じて父と離れては暮して居りませんでした。誇張していうのでは御座いません。事実そうなのです。色々な苦しみや困難な問題にぶつかりますたびに、私の気持、心というものが何だが自然に父のところへ行くのでございます。

泉が湧き出して、その溜り水が溢れて流れ出る口はきまつているように、勿論私の人生に於ける溜り水は泉のような綺麗な流ではなく混濁したどろ〳〵の汚れ切つた苦しみや悩みでございますが、それらの流れ出る口、消化される途、というのは父から貰いましたお念仏より外になかつたのであります。その流れ口に父が立つていてくれて、微笑つていてくれるような、一緒にお念仏をとなえてくれているような、そんな生活をつづけてまいりました。今後もつづけて行くことでございます。

私が外国生活をしていたために、遠く距だたつたままに後れ先立つ別れをした肉親が数人あります。第一、父がそうですし、お世話になつた第二の母もそうですし、弟の幸吉も、妹のらくもそうでした。

今日ここへ伺いまして、私はしみじみと亡き妹のらくのことを想い浮べて居ります。最初の母が亡くなつた時、私は十九、らくは十五で、女学校の二年か三年、その下に妹が一人と弟が二人あつたのです。そしてあの「何もしない父」が居たのです。

何もしない父、と申しましたが、実際父はその点可成徹底していました。母が台所でせつせと働いていると、座敷の方でポーンポーンと手が鳴つた。母が手をふき〳〵急いで座敷へ行つて見ると悠然と父が座つていて〈そこの煙草盆を一寸こちらへ持つて来てくれ〉といつたそうです。まあそんな調子だつたんです。

そうかと思うとこんな話もあります。ドイツから帰りたてに社会事業の資金稼ぎに神田須田町の角でやつていた店

（当時まだ専売でなかつた煙草）が失敗に帰して、失職のまま大阪落ちをした時に――其後岡山の六高に赴任したのですが――まだ妹のらくが赤ん坊で乳を飲んでいたが、母の乳が充分出ない。そこで母が長火鉢の引出しからなけ無しのお銭をあつめて「これでミルクを買つて来て下さい」と散歩に出る父に手渡した。待てど暮せど父は仲々帰つて来ない。夜中過ぎになつて、今頃はありませんが当時は流行だつた白く貼つた支那鞄というやつを担いで、鼻唄で帰つて来た。そして「お父さんミルクは」と聞いたら「あゝ忘れた」という。何でも、散歩していたら碁会があつて、碁の好きだつた父は、ウン丁度会費に足りる金があるワイとばかり、のこ〳〵と入つてしまつて、賞品の支那鞄をもらつてよい御機嫌で帰つて来たのだそうです。あんなに困つたことはなかつたよ、と母が笑い話によく出したものでした。

その父を筆頭として家族六人です。その炊事から洗濯、着物のつくろいから布団の仕立まで、全部らくがやつたのです。十五の歳からお嫁に行くまでの八年間、らくがやつてくれたのです。本当によくやつてくれたと思います。

今こんなことをお話していると、恐らくらくは父母と一緒に居て「兄さんが、今頃になつてあんなことを言つてるわ」と笑つていることだろうと思います。

今度名古屋に参りましたのは、私がペルーへ行きました時からの三十五年来の友人が営んでいる貿易商社に招かれてであります。その友人が社長でありながら東京から離れられない事情にありますので、代りに副社長として座つていてもらいたいというので、その好意を素直に受けたわけでございます。

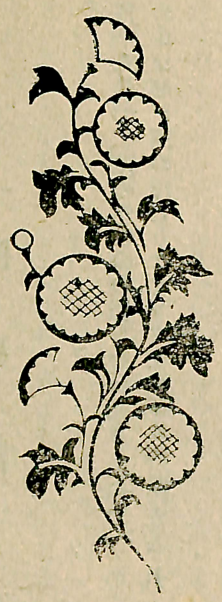
この友人は私より数歳年長の先輩ですが、実に縁が深い友人で、私がペルーに行きまして早速第二世の為の小学校を創立いたしました時、この友人の長女と長男が入学して来たことでありました。又、彼は昭和八年頃一寸帰国しました時、わざ〳〵京都に父を訪ねてくれて私の様子を父に知らせてもくれました。今や父も亡く、又彼の長男も不幸にして夭折してこの世に在りませんが、私と彼との友情の基底にも、これらの亡き人々のこころも礎になつて居るといえましょう。

出て来ましたお蔭で、かく皆様ともお会い出来ましたが、先程の榊原さんのお話にもありましたように、過ぎて見れば廿五年も長いもののようでもあり、又一瞬のようでもあります。何だか、今日始めて参列した一道会という気がいたしません。

海岸に立つて見ると、島々がちよこんちよこんと浮んでいる。離ればなれのように見えるが、海の底ではみんなが

つながつています。水があるから、地つづきが見えないだけの話であります。人世の姿も、そんなものではないでしようか。思いもかけずこんなことになつたとか、突然こんな事になつたとか申しますが、それは、そうなるべきものが私達にはわからなかつただけのことで、総ては業縁のつながりであり、人生にも離れ小島はないことを思えば、良きにつけ悪しきにつけて、合掌する以外に、私達の姿を見出し得ぬことで御座います。

どうぞ今後よろしくと、そして、勝手放題のことをしていた私をどうぞお許し下さいますようにと、心からお願い致す次第でございます。



ゲーテの言葉

一体世間の人が自分と調和すべきものだと望んでいるのは大馬鹿だ、私は決してそんなことは望まぬ。私はどんな人に対しても其人をただ一個の独立した人と見て、その人から学ぶべき所があれば学び、その人の特徴が何処にあるかを知ろうと努めるのみで、それ以上の同情を得ようなどとは思わぬ。かういう風にして私はどんな質の人とでも交際が出来るようになつた。……。

（交際の態度）

自分を立派に見せかけようとしている人はいたる処にあるが、完全なもののために、喜んで自分を帰投しようと心掛ける篤実な人は何処にも居ない。……

（作者の弊風）

最も小さい草でさえも人間のために生えたものは一つも無いということは、人間の考え及ばないことだ

（生物界）

現代思想ということに人は心をひかれるが、幾百年経つてもすこしも価値の落ちぬものを読まねばならぬ…。

「四聖諦」を聞く

花田正夫

二月十五日の仏陀の涅槃会の聖日を迎えました。この日、ニレンゼン河のほとりサラソウ樹の下に静臥なされつゝ

「阿難よ、悲しむのをやめよ。生あるものは必ず死に帰す。如来の色身はここに滅するも、法身は常住である。汝等、法を信じて、何処までも求めて行けよ」

と最後の訓えをねんごろに遺されて、八十年の御生涯を終え給うたのであります。

星霜すでに二千五百年をへだてましたが、法灯は昭々として輝いて我等を照らし、導いて下さるのであります。今日はその根本法輪として四聖諦を仰ぎましよう。

四聖諦とは、聖人（せいじん）、即ち仏陀の智慧によつてあきらかにせられた四つのまことであります。そして釈尊が卅五歳御成道の日から、八十御入滅の夕べまで、くりかえしまきかえし万人にねんごろにお説き下さつて、その迷妄を破つて下さつたもので、いわば釈尊が我々人類にのこし給うた無上の宝珠であります。

さて教法が何百年何千年と伝承されます時、どうしてもまぬがれ得ないことは、教の概念化ということであります。初め教と人とが一つにとろけています時は問題がありませんが、それが離れて、教が一つの概念としてのこされて行きますと、大切な生命を失うて、枯渇した川に水を求める悲しみを人々は繰り返さねばなりません。私自身、この大切な四聖諦の教も概念の殻にへだてられて、無味乾燥のままで永年すごしました。

それにつけましても、釈尊御在世中、『仏陀』の名におどろき、仏陀の慈悲に接し、「エイ、ビクシユ（来れ、比丘よ！）」と喚びかけられた人々が、喜びむせびつゝ仏陀のふところに帰投した模様を阿含経で知らされる時、親鸞聖人の

釈迦如来かくれましまして二千余年になりたまう
正像の二時は終りにき如来の遺弟悲位せよ。

の和讃もしみ〴〵感佩されるのであります。

さて最近、「法」ということが偏重せられて居りますが、それは智慧を中心にした聖道門の立場で、浄土門は飽

くまでも「方便法身の仏」「阿弥陀仏」を中心にされて居りますことは私共凡夫にとつては大切なことと思います。

私の大学以来の友人の一人が

「僕は南無妙法蓮華経の題目を中心とする教で何十年もやつて来たが、浄土教の南無阿弥陀仏の名号は何時も羨ましい。それも、理論からはどちらでもよいはずなのだが、実際となると題目は対象が経典であるが、名号は仏陀である。一つは静物で一つは人格である。そこに題目を続けているとこちらが動的になるが、念仏はこちらが落着いて来る。我々は人間であるから矢張り静物でなく人格でないとしつくりしないのではないかと思う」

としみ〴〵と語つてくれたことがあります。かといつて法を軽んじてよいというのではありませんが、凡愚の身という自分の足もとを省みます時は、法身の仏としてあらわれて下さつたことがこの上もなく尊く有難いのであります。

自然法爾章で「いろもなくかたちもましまさぬよう」ということを申されてありますが、それは私共の救われて行く涅槃寂静の境界を示されたので、信仰の対象ではありません。法蔵と名告り、阿弥陀仏とあらわれて下さる大悲の仏がましましてこそ念仏申される身に育てあげて頂けるのであります。

仏の中に生ける法は輝き、法はそのまゝ生ける仏となつて、往還して下さる、法即人、人即法の仏をひとえに仰ぐことであります。

一、苦聖諦

四聖諦の第一であります。釈尊は私共の住む境界を、四苦（生・老・病・死）八苦（愛別離苦・怨憎会苦・求不可得苦・五蘊盛苦）のみち〴〵た苦の世界であると教えられるのであります。

又仏陀の出家求道の根本動機が生老病死苦等の現実苦、万人ののがれぬ苦を問題とせられて、そこに不滅のひかりを求められたのであります。阿含経には

「我はかつて極めて優柔なる身なりき。泉池美しき家にカーシイの衣をのみ撰んで纏い、冷熱等を避けるために白き傘蓋は常にわが頭上にかざされ、住むに三時殿あり、雨期の四ケ月は舞姫達に囲繞せられて雨時殿に過しき。されど、われ老者を見て老の来るべきを知りて青春の誇りを捨て、病者を見てやがて病むべきを知つて健康の誇りを捨て、死者を見て死の襲うべきを知り生存の誇りを捨てぬ。」

と示されてあります。

苦の諦観こそ釈尊求道の出発点であります。然し私共の

心中を省みます時、決してそのように感じて居りません。
無常の世にありながら何時までも変らぬ常住と思い、
苦の世界に沈みながら楽しみの多い世と思いこみ、
穢れ汚れたことも知らず清浄と思い安んじて居り、
因縁假和合の身を知らずに、我を振り廻して居る、
所謂、常楽我浄の四つの転倒したかんがえに終始して居るのであります。そうしたことの省みさせられる古今の詩や歌などを拾い上げますと、
会者定離かねてありとは知りながら昨日今日とは思わざりきに。
春の夜は春の夜ながらさりながら。
無常のことも一応は頭で分つていながら情意の上で「さりながら」がとれないのであります。
幾山越え去り行かば淋しさのはてなんくにぞ今日も旅ゆく。
山の彼方の里遠く幸住むと人のいう。ああ我人と求め行きて涙さしぐみ帰り来ぬ、山の彼方の里遠く幸住むとなおも云う。
苦の娑婆や花が開けば開くとて。
悲しきかなや人の身は、無き慰めを尋ねわび、道なき森に分け入りて、などなき道をもとむらん。
何時かは〳〵と幸福を求めつゝ、幻滅又幻滅の悲哀をくりかえしながら性こりもなく旅する我等であります。
糞中の穢虫、居を競うて其外のきよらなるを知らず。
残水の小魚、食を争うてやがてその渇をさとらず。
とは他人ごとではありません。
我ならぬ我に何をか頼むらんなき我にわれなどたよるべき。
我というなきわれにわれ囚われてわれとわが身を苦しませける。
水の上に絵をかくよりもはかなきはおのが心をたのむなりけり。
等々、我執、我慢の身を吐露された懺悔の叫びであります。ことにこの苦の境界についてビンズル経の「黒白二鼠」の喩えは、トルストイ翁を震駭せしめたと伝えられます。又ツルゲネフの詩の「東方の説話」もたしかにここに感動したものと思われます。その此喩は、
「ここに一人あり。荒野にて悪象の追うところとなり、怖れ走れども依るべきものなし。偶々一つの空井戸あり、傍に樹根あるを見出し、即ち根をたよつて下り、身を井戸の中に潜む。時に黒白の二鼠あり交々樹根を嚙み、また井戸の四辺には四つの毒蛇あつてその人をうかがう。下に毒竜あり口を開いて呑まんとするを見る。心に竜蛇をおそれ、また樹根の断たれるを恐るれども、亦如何に

するすべなし。更にまた樹根に蜂の巣あり、樹ゆらいで蜂散じ、飛来してこの人を射し、野火また来つてこの樹を焼かんとす。
されど蜂蜜日に五滴づつ、この人の口中におち来る。この人、蜜を得てその甘味に酔うて憂怖苦悩を忘れてその心中ただ五滴の蜜あるのみ。この人、この少味を貪りてかの無量の苦を忘るるは憐れむべし」
と説いてあります。竜とは死、毒蛇とは病、野火とは老病、蜂とは邪見、白黒の鼠とは昼夜。樹根とは生命。五滴の蜜とは、五欲（食欲、色欲、睡眠欲、名欲、財欲。又は目や耳や鼻や舌や身をたのしませる、色、声、香、味、触の欲）になぞらえられたものであります。
この惨怛たる現実の直視、そこに仏法の出発点があるのであります。然しここでまた不徹底な聞き方に終りますと、人生は苦である、つまらない世界であるとなつて、現実逃避となり易いのであります。古歌に
世をいとい人山に入り山にてもなおうきときはいずち行くらむ
とありますが、世を逃げて山にのがれるのが仏教の面目ではありません。そこにもまた安住の地はないのであります。人生は逃避しきれるものではありません。この点をおさえて涅槃経には、八転倒の迷いを説かれているのであります。常楽我浄が転倒であるばかりでなく、無常、無楽、無我、無浄とそこにひつかかつているのもまた迷いであると示されているのであります。
「空じや、空じやは、空ではないぞ」と禅家もよく申しますが、肯定主義が破れて、不徹底な否定主義にとどまりますと、退嬰的、消極的なうつろさに落ちこんで行きます。それは憍慢心が崩れて、卑屈に沈んでいる状態であります。そのいずれも、苦界ならぬはなしと、苦聖諦において教えられるのであります。

二、集　聖　諦

生は苦なりと諦観し給うた釈尊は、その原因を求めて内なる煩悩にありとつきとめられたのであります。ことに、無明と渇愛の二つの煩悩をその中心とせられました。
無明とは、色々の煩悩に覆われて、智慧のひかりを失つて、真実を知る力のないことであります。このために、疑心暗鬼と昔から申しますように、暗い疑惑の心から相手を鬼と見て、怖れ、争うことがやまないのであります。このことについて、一茶の「父の終焉日記」の巻末の余白に
「兄弟二人、親の病気見舞に来りけるに、一人は道近ければ早く立ちけれども、暮れたれば前後も見えず、道に塚穴ありければ、屈み居て明けるを待ちける。然るに、

一人は道遠くしてあとから来りけるより、その穴に落ちけるに、先に入りたる子は、鬼来りて我を喰わんとすらんと防ぎ、あとから来れる子は、穴に鬼ありて我をあやめむかと、互に摑みあいけるに、夜明けて見れば兄弟なり。生死の間に迷いおれば、皆無明の鬼なるべし。」と誌して、自分の一家の葛藤を「無明のいたすところ」と悲しんで居ります。

渇愛煩悩とは、渇した者が水を求めるように、人に物に無限の欲求をもつて愛着して行く心であります。「煩悩深くして底なし。生死の海また辺際なし」とはその当然の結果であります。昔、西洋の或国で、重い罰の一つとして、一日中底のない槽に水を汲ましたそうであります。汲み入れる下から流れ出てしまう、それでいて絶え間なくそれを満たそうとする。そうした罪人の苦は、渇愛煩悩のとりことなつている私共のそのまゝの姿でありましよう。

さてこの集聖諦を聞いて、私共の銘記せねばなりませんことは、苦の原因を内なる煩悩にありと釈尊がかねて見抜かれた一事であります。仏教以外では、苦の原因を皆外に求めて居ります。そのことも大切なので軽視してはなりません。自然科学も社会科学も、そこに発達したので私共は無数の恩恵をうけて居ります。然しその道はどんなに発達いたしましても、一時的、相対的な解決に終つて、徹底した解決にはなりません。たとえば、東海道を昔は歩くか、籠か馬に乗るかで旅をしていました。それが馬車となり、自転車、自動車となり、汽車、電車となり、航空機となりましたが、それでは昔の人より今の人が幸福になつたかと、反省して見ます時、否と云う外はありません。私共の満足感は喉元をすぎる時だけで、すぐその下から、足らん〳〵となるのであります。俗謡にも

波の音きくがいやさに山家に入れば
またもや聞こゆる松風の音

とあります。ここで立ち止つて熟考せねばなりませんことは、波の音をいやに思う自分の心の解決ということであります。そのことを他にして、外にどんなに走り廻つても、そこに究竟の安住所はありません。

或方がどもりで非常に苦しまれました。矯正院にも入つたが、そこでは同病者が多く、また同情者に取りまかれているので気持は非常に楽で、どもりも楽になり、発声法も技術的に教えられるが、一たびそこを出て、緊張するようなことがあると、再びどもり出して、何ケ月かの苦労も水泡に帰してしまつた。ところが成日、猫の子一匹居らぬ高い山に登つて、そこで話をして見るとスラ〳〵とちつともどもらない。それから「人が笑つてもそれを苦にせぬ人間

になろう、それが根本の解決である」と知つた、と語られました。そのことが実行出来るか否かはさておいて、道理はその通りであります。

さて集聖諦の教の鏡に照らされまして、見えて参ります自分自身の姿は、常に苦の原因を外において、誰が悪い、彼がいかぬと、他を責め抜いている愚かさであります。

「我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず、共にこれ凡夫のみ。云々」

の聖徳太子憲法は、自分の顔に目がついて居りながら、自分と見ることの出来ぬ顔を照らして下さる鏡でありますが、人間の盲点をつかれたもので、人の子のあろう限り無くてはならぬ金句であります。

〔未完〕

貧女の一灯

舎衛国に一人の貧しくよるべのない女乞食が住んで居りました。この国の王様を初め色々な人達が、仏様をそれぞれに供養するのを見まして、独りで思いますには、

「自分は貧しい生活をしていて、仏様にお会いしながら供養することも出来ない。切角、美田がありながらも蒔くべき種がないようなものである」

と、そのことを非常に痛み悲しんで乞食を続け、すこしでも供養申したいばかりに一日中休まず働き、漸く一銭たまりました。早速油屋に行つて油を求めますと主人が、そればかりの油では何の役にも立ちませんがどうするのですか、とたずねました。乞食がすべてを打明けますと、主人が非常に感心して、油を倍に増してくれました。

貧女はその油をもつて大いに喜んで精舎に参り、仏様に捧げ、仏様の沢山の灯火の中に置き、仏を礼して帰りました。ところが不思議なことには、夜が明けて他の灯火は皆消えましたのに、その小さな灯火ばかりが燃えて居りました。

（賢愚経）

あとがき

退藏

春曉の山を動かす魚板哉

ながいきびしかつた冬であつただけに、今年の春光はことに嬉しく迎えて居ります。

さて本号は印刷所が入試問題印刷という特別な仕事で忙殺されましたため、二三月号を合本いたしました。御海容下さい。

○

一月の雪の日、高松の長岡さんと富田林の浅野さんが来庵。ことに浅野さんは三十年振りの面会、篤信の御母堂様も何年かさきにやすらかな御往生とのこと、又大阪府下のMさんが、戦后巨万の富を得られ、子供方も立派になり、何一つ不足なく居られたのに、睟臓癌で亡くなられたが、見舞い客の一人々々に「この通りだすデ、なんにもあきませんデ。ただお慈悲だけです」と念仏の中からくりかえし述懐されていた由を承りました。

○

「争闘と解脱」は、けんか性のやまぬ私共に唯一無二の救いのひかりを与えて下さるもので、絶対信からほとばしる先生の慈訓であります。

「近角先生の想い出」の松村様は、岡山県の出身で、一高時代から先生との御縁の深い方であります。長く千葉医大の先生をしていられましたが戦時中興亜院に入られまた南京政府の顧問もせられました。敗戦と共に大変動をうけられました。幾多の経験はいよ〳〵信香を放つて下さることであります。

「仏典と私との親しみ」の福島先生の御講話は、教典を私共の日常生活の上に味う上に大きな手がかりを頂けるものであります。何百年何千年と教法が伝承されますと、そこに教法の概念化が生じて、生き〳〵とした味いを汲み難いもので、次第に浮調子に流れ勝であります。そこに外殻を破つて中味を頒つて頂くことは有難いことであります。赤児に色々な滋養物を乳として頂けると同様であります。慈育の思とはこういうことでありましょう。

「堂の鈴」では、一郎が長い迷路から一縷の光明を発見するところを述べて下さいました。雪深い新潟市で執筆下さる佐藤様のかつての句

ころぶぞとまた子を抱く雪の路

を思い併せて居ります。

「一道会の記」は榊原師がお忙しく、ことに昨秋は松山大学の仏青に出講せられたり、その時の「禅と念仏」の原稿を急がれたり、また御長男のおよろこびをひかえられるとか、学校の仕事など公私多端でありました。引き続いて補足願えることであります。

「ここに来るまで」の池山様のお話は、廿五回忌の一道会の記念とさせて頂きます。

筆者住所録

千葉市長洲町一ノ一一七　松村　粛
東京都世田谷区上北沢三ノ一三一二　福島政雄
新潟市関屋堀割三ノ十一　佐藤強三郎
京都市右京区山田開町浄住寺　榊原徳草
京都市右京区山田葉室町十三　白井成允
名古屋市東区東白壁町十八　池山寿夫

御案内

毎月第一、二、三日曜、午后一時半、一道会。市電新郊通り一丁目下車、東へ一丁半

毎月廿四日午前、午后、市内昭和区小桜町、教西寺、法活会。市電御器所通り下車

定価一部　二十五円（送共）
半年　百五十円（送共）
一年　三百円（送共）

編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫
印刷人　名古屋市千種区千種町馬走二八　本田政雄
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光　第十五巻　第一号　昭和三十八年三月二十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可